

## ニュージーランド先住民マオリの同化と自立

宮里孝生

### はじめに

現在では地球規模で文化多様性が喪失しつつあると言われている。それは過去西洋諸国が競って世界に繰り広げた植民地化とそれに伴う同化政策、また近年益々加速するグローバル化の影響などが主な原因であることは間違いない。とはいえ一方で、マイノリティ文化・先住民族文化復興の動きも世界各所で見られることもまた事実である。以下では、西洋人との接触で文化変容を強いられつつも、独自の民族文化のあり方を模索してきた、ニュージーランド先住民マオリの力強い文化的営みをみていく。またその中で、エスニック共生について考察したい。

ここでマオリの概要について簡単に触れておきたい。マオリとは今から1000年以上も前よりポリネシア中央付近からカヌーでニュージーランドへ移住してきた海洋民族である<sup>1</sup>。身体的特徴としては、目、髪は黒く、皮膚は浅黒い。伝統的マオリ社会の特徴は、祖先を共有する者同士(出自集団)が一定の土地を共有し、協力関係の中で生業<sup>2</sup>を営むところにある。信仰の対象は、世界を創造した神々や祖先の霊であった。古来各マオリ集団はマラエと呼ばれる集いの場を守り伝えている。マラエは祖先の霊が宿る神聖な場として解釈され、儀礼上重要な意味を持つ。マオリ社会では、出自集団への帰属意識・祖先との絆・マラエとの緊密な関わりがとりわけ重んじられる。現在マオリの人口は約57万人、ニュージーランド全人口の14.7%を占める<sup>3</sup>。マオリはマジョリティである白人をパケハと呼ぶ。

### 1 マオリとパケハの接触の歴史

ニュージーランドがヨーロッパ人に入植の対象とみなされるようになったのは、1642

---

<sup>1</sup> 移住年代は特定できていない。数百年かけて断続的に移住したと考えるほうが妥当であろう。

<sup>2</sup> 生業は農耕・採集・狩猟・漁労などが挙げられるが、とりわけサツマイモ(クマラと呼ばれる)の栽培は重要な位置づけにあった。

<sup>3</sup> 人口比率の内訳は、マオリの他に、ヨーロッパ人67.6%、太平洋諸島民6.9%、アジア人9.2%など(2006年度国勢調査)。

年のエイベルタスマン(オランダ人)による発見、ならびに 1769 年のジェームスクック(英国人)による再発見に端を発している。後にフランスなども入植に興味を示したが、交易などでマオリとの関係を優位に進めた英国が、1840 年、ワイタンギ条約を締結し、ニュージーランド領所有を宣言するに至る。マオリが解釈した条約の内容は、端的に述べると、英国とのパートナーシップの構築であり、人権・文化・土地・その他の資産などは英国エリザベス女王の保護の下保障されることになっていた。しかし彼らの前に待っていたものは無慈悲な土地の収奪や同化政策であり、南海の孤島の静寂は破られる。

条約を機に入植者は増え続け、牧畜や農耕用の土地の確保を目的として、マオリの土地を不法な手段で手に入れようとする者が目立つようになっていく。マオリはこれを食い止めるために部族を超えてマオリ王を擁立し、パケハ(白人)との間に大規模な戦争を展開したが、圧倒的な武力により鎮圧され、土地と共に多くの人命を失う破目になった。更に悪いことに、入植者の持ち込んだ伝染病によっても、多数のマオリが命を落とした。

パケハ宣教師は、一方で、入植当初から非文明にある異教徒として映ったマオリのキリスト教化を図った。マオリ信仰の対象を祀る伝統的な場所には、教会などのキリスト教関連施設が建てられ、マオリに改宗を求めた。宗教的同化政策は、マオリに西洋的価値観の同化も促し、マオリ固有の価値観や慣習が喪失の一途を辿る。現在はマオリのほとんどがキリスト教徒である<sup>4</sup>。

植民地政府は、教育政策においても、マオリの西洋化を進めていく。1867 年には先住民学校法が施行し、学校ではマオリ語使用は禁止され、英語のみで授業が行われることになる。結果、マオリ語話者の人口が減少し、言語の消滅が危惧される状態にまで陥った。言語的同化のみならず、西洋的価値観の移入という点においても、教育政策は宗教的同化とともにパケハにとって都合なものとして働いた。

こうして経済的基盤である土地の多くを失い、言語を否定され、伝統的価値観までもパケハの都合によって曲げられたマオリは、集団帰属意識の相対的低下、伝統的社会構造の変容、さらには伝統芸能や儀礼の衰退など、文化的にも社会的にも多くの所産を失う破目になった。

## 2 文化復興への模索

マオリは西洋的社会に取り込まれていく一方で、19 世紀中盤以降、パケハに抗する運動を幾度となく展開する。運動は前述したマオリ王を中心とする闘争、預言者らが主導する宗教運動、混血マオリ政治家による共存志向の運動など様々であったが、マオリの

---

<sup>4</sup> マオリは伝統的宗教観までも自ら否定するようなことはなかった。マオリ宗教は、キリスト教と習合した状態で、今尚人々の間で広く信仰されている。

文化的・社会的諸権利の回復、民族的地位の向上を目的とするという点では一致している。そして 20 世紀中盤以降の運動は、北アメリカで起こったマイノリティ・エスニック・グループの運動とも呼応して民族自立・文化復興の機運を一層高め、結果、国の政策においてもマオリの利権に対し一定の配慮が見られるようになっていく。本稿では各運動の具体的内容については割愛する<sup>5</sup>が、これら一連の闘いの延長線上に現代マオリの姿を見て取ることができる。以下では、現代に復興するマオリ文化の事例をいくつか採り上げる。これらはパケハとの直接的かつ長期的な接触の中で、一度衰退しつつも再活性化した文化要素であり、現代ニュージーランドにおける先住民族アイデンティティ主張そのものである。



先住民としての諸権利の回復を訴えるマオリ(北島・ワイタンギにて)

### (1) 言語の復興

先住民文化の象徴ともいえるマオリ語は、一時は消滅が危惧されたものの、1960年代後半から70年代初頭に始まる言語文化復興運動<sup>6</sup>をきっかけとして言語的地位が向上した。1987年にはマオリ語法が施行し、英語とともに公用語として公的な場での使用が正

<sup>5</sup> 民族自立運動の詳細は(石森 1982:257-287)を参照されたい。

<sup>6</sup> マオリルネッサンスとも呼ばれる。

式に認められるまでに至った。現在ではマオリ語習得を促す教育機関も幼児教育から高等教育すべてのレベルにおいて整えられ、多くのマオリ子弟がバイリンガルに育っている。大人世代もマオリ語習得（あるいは再習得、運用能力の向上）を目指し、地域のマオリ語学校、テレビ、ラジオ等を利用して学習する者が多くみられ、言語文化復興に対する意識の高さがうかがわれる<sup>7</sup>。

## (2) 伝統芸能の復興

伝統の歌舞は、マオリの西洋化と共に一時は衰退を免れなかったが、現在では学校教育、マラエの催し、観光施設、祝祭やその他数々のマオリ関連のイベントなどでさかんに取り入れられている。マオリ自らの復興への自助努力と、観光産業<sup>8</sup>における文化的他者からの需要が相乗効果を生み再活性化を支えている状況にある。各地にはアマチュアレベルからプロレベルまで大小様々な舞踊団があり、伝統的歌舞を伝承するとともに時代に適応した新たな歌舞をも創造している。教育の場におけるマオリ芸能の実践は、子弟に対するエスニック・アイデンティティの構築に寄与し、また観光施設などにおいては、文化的他者に対するエスニック・アイデンティティ主張の手段として機能する。

## (3) 祭祀の復興

マオリ固有の祭祀も一部復興している。近年で最も有名なものはマオリ新年祭が挙げられよう。過去のマオリ暦では1年のサイクルの開始が西洋暦でいう6月上旬あたり<sup>9</sup>に定められ儀礼的祭祀が各地で催されていた。その主旨は自然の恵みに感謝し次期の生業の安定を願うというものであった。パケハ文化の移入によりその慣習は歴史の片隅に埋もれたが、今世紀に入って、娯楽的要素を多分に盛り込んだ祝祭として再編され復興した。マオリ新年祭は北島の一部の地域から散発的に展開し始めたが、わずか数年の間で南島を含むあらゆる地域に波及している。規模も様々で、小規模のものから部族規模、国家規模のものまである。この新年祭は冬季観光イベントとしての位置付けにもあり、他エスニックグループの参加も歓迎される。

## (4) 血縁集団の再結束化

マオリのネットワークは再編の過程にある。過去、土地を奪われ、経済的基盤を失ったマオリの大半が戦後都市生活者となったが、彼らの中には帰属すべき出自集団ならば

---

<sup>7</sup> 筆者による調査（2002年7月～9月、2005年5月～7月）

<sup>8</sup> マオリの伝統芸能は20世紀初頭には観光の重要な要素として国家に認知され、保護・振興が図られている。

<sup>9</sup> 太陽と特定の星(代表的なものとして牡牛座のプレアデス星団が挙げられる)の天体上の位置関係に加え、(地域によって)月の満ち欠けを考慮して元日が定められる。

にマラエとの関係を保つことができなくなった者（保たなくなったも者）がいた<sup>10</sup>。彼らは、血縁関係で成り立つ古来の集団組織の枠組みを超えて、都市にて新たなマラエを共有することで独自のネットワークを構築したが、現在ではそのようなマオリの中にも再度出自集団との関係を保持しようとする者が増えてきている。それは一般に、「リユニオン(reunion)」と呼ばれる、集団メンバーの再結束を目的とする運動の展開によるところが大きい。インターネットが普及している現在では、各出自集団がホームページを持ち、血縁関係にある者に集団への回帰を呼びかけ、また会報(newsletter)などの配信もおこない、会合・イベントなど親睦の機会を随時知らせている。この出自集団再結束化の動きは、マオリの帰属意識を刺激し、ホームランドにおけるマラエ活動の活性化にも寄与しており、現代マオリ文化の展開のうえで重要な意味を持つ。

### 3 文化復興への課題

前章では、近年再活性化したマオリ文化の諸側面について肯定的に述べてきたが、以下では復興に関わる課題について少し触れておく。ここでは主に、マオリが実践する文化行為と文化的他者との関連性に焦点を当て述べてみたい。

まず、言語復興を取り巻く問題である。マオリ語は公用語として認められ、言語教育の環境も随分整えられてきたものの、実際にはその使用機会が必ずしも多い訳ではない。入植者がもたらした英語は、ニュージーランド社会において主要言語の地位にあり(e. g. 職場、公共施設、メディア)、マオリにとっても日常生活のうえで必須である<sup>11</sup>。マオリ語復興とは英語からマオリ語への移行ではなく、両言語の並存という文脈において成り立つものであり、今後のマオリ語使用環境の展開はマオリ自身の自助努力によるところが大きい。

次にマオリ芸能である。これは学校教育やマラエ活動に積極的に取り入れられ、現代マオリ文化の活性化に大きく貢献していることは事実である。しかし観光現場におけるマオリ芸能は、観光需要など文化的他者との関わりに左右される不安定な要因を抱えている。もし仮に観光需要が低迷した場合、洗練された技能を有しプロとして観光産業に従事するマオリの経済状況にもマイナスに反映し、芸能文化を支える人口の減少が危惧される。ついでながら、文化的他者の興味・関心をもたらす観光需要はまた、近年甦ったマオリ新年祭の展開を考える上でも無視できない<sup>12</sup>。

---

<sup>10</sup> 年月を経るにつれて出自が不明になってしまった者、出自を認識していても自ら帰属を断ち切ってしまった者など、内訳は一様ではない。

<sup>11</sup> 筆者の調査(2006年3月時点)では、流暢なマオリ語話者でさえも、第一母語は英語を挙げていた。

<sup>12</sup> 新年祭は季節の催しという性格上、先の芸能文化と単純比較はできないにしても、文化的他者の関心度は新年祭の活性化にも反映するものと思われる。今後継続して調査する必要がある。

血縁集団再結束化の動向であるが、これは当事者内部のみで作用する自己完結型の動向にもみえる。しかし一方でマジョリティを意識した現代マオリの「平和的抵抗運動」との解釈も可能である。強固なネットワークを構築しようとする行為は、パケハ主導の文化・社会のあり方に対する反骨精神と表裏で結びついていることが考えられ、過去に喪失した所産・諸権利を回復するうえで大きな力となり得るのではなかろうか。問題の所在はその行為へとマオリをつき動かすパケハとマオリの関係の狭間にある。

## むすびにかえて

過去、先住民マオリに対して行われた同化政策は、計り知れない文化変容をもたらした。しかし激変する時代の中で葛藤し、自文化のあり方を模索してきたマオリは、断片的とはいえ、マジョリティ文化に対置する文化の諸要素を近現代に復興させた。現在、マオリ文化と一般に呼ばれるものは、マオリが先住民たるうえで必須のものとして再活性化させた文化要素の総体であり、エスニック・アイデンティティ主張が込められるものである。もともと、文化的他者との関わり(影響・干渉)に左右される不安定な側面も持ち、解決困難な課題も多い。とはいえ3章にみたように「長いものに巻かれる」力強さも有するまでになったマオリ文化環境は、彼らが自由に実践できる文化的行為の幅を広げ、有形無形の外部の抑圧から生じた、これまでの不満や軋轢を軽減する役割を果たしているのではなかろうか。換言するならば、マオリが標榜する文化多様性の再構築が(あるいはその取り組みが)、エスニック共生へ指針を与える不可欠な要因となっているのではなかろうか。

## 参考文献

- Best, Elsdon 2002, *The Astronomical Knowledge of the Maori Genuine and Empirical*, Kiwi Publishers, Christchurch.
- Hakaraia, Libby 2004, *Matariki: The Maori New Year*, Reed, Auckland.
- Metge, Joan 1976, *The Maoris of New Zealand*, Routledge and Kegan Paul Ltd., London.
- Miyazato, Takao 2004, “A Study of the Relationship between Marae and Maori: The Case of Te Arawa”, *Bulletin of the Graduate School of International Cultural Studies Aichi Prefectural University*, 5:127-151.
- Sinclair, Keith 2000, *A History of New Zealand*, Penguin Books, Auckland.
- Te Taura Whiri i Te Reo Maori [Maori Language Commission] 2005, *Matariki: Aotearoa Pacific New Year*, Te Taura Whiri i Te Reo Maori [Maori Language Commission], Wellington.
- 石森秀三 1982、「ニュージーランド・マオリの民族主義運動：脱部族化とキリスト教」(『神々

- の相克：文化接触と土着主義』中牧弘允編)、pp. 257-287. 新泉社.
- ・内藤暁子 1999、「都市のマオリ：その歴史と現状」(『先住民と都市：人類学の新しい地平』青柳清孝・松山利夫編)、pp. 41-77. 青木書店.
  - ・平松紘、申恵手、ジェラルド・P・マクリン 2000、『ニュージーランド先住民マオリの人権と文化』、明石書店.
  - ・宮里孝生、2005「マラエをめぐる観光人類学的考察：現代マオリの伝統文化と観光の相関性」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』、6:73-90.

## 著者プロフィール

**宮里孝生 (MIYASATO Takao) 野外民族博物館リトルワールド学芸研究員、国際文化研究科博士後期課程在籍 文化人類学、博物館学**

### ■略歴

鹿児島県出身。1992年、京都外国語大学外国語学部英米語学科を卒業後、英語教諭として京都市内の中学校に勤務。7年間の教員生活を経て、ニュージーランドに渡航し、あこがれの海外放浪生活を満喫する。現地で先住民マオリの文化的ダイナミズムに深い感銘を覚えたことがきっかけとなり、2001年、愛知県立大学大学院国際文化研究科博士前期課程に進学し文化人類学を専攻。2003年から同大学院博士後期課程に在籍。在学の傍ら野外民族博物館リトルワールドにて非常勤学芸員を務め、2006年に同博物館専任学芸員に着任。愛知県立大学、相山女学園大学非常勤講師。国際文化修士。所属学会・研究会：日本文化人類学会、日本オセアニア学会、ニュージーランド学会、中部人類学談話会、愛知県立大学国際文化研究科研究会。

### ■これまでの/これからの研究活動

ニュージーランド先住民マオリが営む文化活動について文化人類学的見地から研究しています。特に、伝統的祭祀場マラエにおける先住民活動の事例研究を通して、マラエが持つ文化的機能・社会的機能の分析に力点を置いています。また、近年では先住民文化復興運動の動向にも興味を抱くようになり、「伝統」を民族結束の「手段」として活用する先住民パワーと現代ニュージーランド社会形成過程との関連性について少しずつ研究を進めているところです。刊行論文：“A Study of the Relationship between Marae and Maori: The Case of Te Arawa” (愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 5:127-151 2004年)、「マラエをめぐる観光人類学的考察：現代マオリの伝統文化と観光の相関性」(愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 6:73-90 2005年)、「世界の民族資料を活かす場としての博物館のミッションと実践」(北方民族文化シンポジウム報告 21:7-12、北海道立北方民族博物館 2007年)、“A Cultural Anthropological Study of the Matariki Tradition and the Maori New Year” (愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 8:193-211 2007年)、「映画『クジラの島の少女』を扱った異文化理解教育の試み」(愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 9:179-189 2008年 共著)

### ■「共生」について

グローバル化が加速し、人・モノ・金・情報が地域・国家の枠組みを越えて錯綜する今こそ、広い文化的視野と「共生」への理解が求められる時だと思います。「共生」のためには、それぞれの価値観の差異の背後にある合理性を認めること、同時に人類の根底にある普遍性に気付くこと。わたしはそう思っています。野外民族博物館リトルワールド(愛知県犬山市)では、人類の叡智が生み出した世界各地の民族資料や展示家屋を用い、多様性と普遍性を紹介しつつ、人類の平和的共生を考える機会を提供しています。



調査でお世話になったマオリの知人と共に(北島・ロトルアにて) 左から3番目